

令和４年度第１回乳幼児教育保育の質の向上に関する懇談会 議事要旨

１ 開催日時

令和４年６月２８日（火） 午前１０時～午前１１時３０分

２ 開催場所

広島市役所北庁舎６階 教育委員室

３ 出席者等

(1) 学識経験者・教育関係者・関係団体代表者

朝倉 淳【座長】※	(安田女子大学 客員教授、広島大学 客員教授)
徳永 隆治	(安田女子大学 教育学部 児童教育学科 教授)
渡邊 英則※	(認定こども園 ゆうゆうのもり幼保園 園長)
松尾 竜※	(広島市私立保育協会 理事長)
米川 晃	(広島市私立幼稚園協会 理事長)
松川 美香	(広島市保育園長会 代表)
木村 みゆき	(広島市立幼稚園長会 会長)
清水 剛	(広島市小学校長会 代表)

※オンラインによる出席

(2) 事務局（広島市こども未来局・広島市教育委員会事務局）

教育企画課長、指導第一課長、特別支援教育課長、教育センター次長
保育指導課主幹

４ 議題（公開）

- (1) 令和４年度 乳幼児教育保育の質の向上に関する懇談会について
- (2) 外国にルーツを持つ子どもへの支援について

５ 傍聴人の人数

なし

６ 懇談会資料名

- ・ 令和４年度 乳幼児教育保育の質の向上に関する懇談会について（資料１）
- ・ 外国にルーツを持つ子どもへの支援について（資料２）

７ 出席者の発言要旨

事務局の説明に対し、以下のような意見・質問等があった。

※ ○は学識経験者・教育関係者・関係団体代表者、●は事務局職員の発言を表す。

- (1) 令和４年度 乳幼児教育保育の質の向上に関する懇談会について
意見・質問等なし

- (2) 外国にルーツを持つ子どもへの支援について

・ 外国にルーツを持つ子どもが安心して園生活を送るために必要な配慮、支援等について

○ 外国にルーツを持つ子どもについて、入園時に詳細な調査をしているということだが、個人情報取扱いの観点から、誰がどのように管理し、活用しているのかが問われる。情報は担任の先生が自由に閲覧できるのか。

● 個人情報徹底して管理するというのが基本で、資料の原本は園長が管理し、必要な情報を教員と共有している。市立幼稚園は、基本的に園長と担任2、3人で保育に当たっているので、全員で情報を共有しないと保育が進められない。情報の取扱いについては、服務研修も含め、園長が教員に指導している。

○ 情報を管理し過ぎることで、入園時に得た情報を活かさない、担任の先生が知らないという状況が起こり得る。担任の先生が子どもの情報を知っているということが必要なので、管理を徹底する中で、どれだけ担任の先生に情報を提供できるかというのが大事だと考えて質問した。

○ 当園には外国にルーツを持つ子どもが複数いるが、最初に直面する壁は意思疎通である。保護者との会話はポケトークを使い、ある程度の意思疎通はできるが、文化そのものの考え方が違うため、食事、行事等について理解してもらえないことがよくある。

次の壁は宗教であり、特に気を使う。当園は寺に由来しており、仏教の考えが保育の根底にある。それとは別に、例えば、食事の前に手を合わせていただきますと言うのは日本の文化の一つだと思うが、日本の文化を受け入れるということに抵抗を示すケースがある。これまでも、個人や主体性を尊重した保育をしているが、やはり集団生活・集団保育なので、例えば、1人だけ手を合わせないという要望には応えるものの、小さなことでも、色々なことをさせないで欲しいという要望が出ることに気を使っている。

そして、一番留意が必要なのは宗教食である。例えば、厳格なイスラム教徒の場合、豚肉・アルコールが禁じられており、しょう油やみりんなどの調味料が使えないので、調理をする品目も限られる。また、ハラール食かどうかということに加え、ハラール食そのものも、どれが当てはまり、どれが食べられないものなのか分からない。食べてもよいという家庭と全くだめという家庭があり、現場は混乱している。

○ 私が個人的に20年以上前から園長をしている海外の幼稚園の状況を話すと、参考資料にある新入園児受付票については、当該園では、公用語とローカル言語の2種類を用意している。参考資料の追加すべき項目は、両親の宗教や食習慣である。また、家庭内での言語についてである。当地では、母親はローカル言語で、父親は英語で話し、互いがそれぞれの言語で会話する夫婦もいる。加えて、兄弟の言語や成育歴、家族の来訪後の年数やインターナショナルスクールあるいは日本人学校等の小学校への思い、来訪目的なども聞くようにしている。

当該園に日本語能力の向上は求めておらず、日本の教育・保育を受けさせたいという方が大半である。当該園では現地語を話す事務職員がおり、他の教員も長く生活をしているので

片言の会話は出来るが、きちんとした会話はできない状況である。しかし、保護者はそのところは求めている。両親共に、日本語は不得意でも、子どもが年長の6月ぐらいになると、園からの手紙等の通訳をしているので、子どもに合わせてタブレットを使用することはない。そのような中、成長・発達に不安を感じる子どもはいるので、言葉が分かり、思いが伝わるように配慮はするが、具体的なことを通年ずっと行うことはない。子どもの力、成長力を感じる。

- 子どもと保護者に安心感を持ってもらうことが重要であるために、保育園の特色から3つのことに着目したい。1つ目は、学校とは違い、保護者と毎日顔を合わせること、2つ目は、給食があり、宗教食への対応などがあること、3つ目は、楽しい遊びが沢山あることである。

1つ目については、保育園では、毎日言葉を交わし、表情を見て内面を読み取る努力をしている。言葉は分からなくても、表情でコミュニケーションを取ることができ、それが保育園の強みである。さらに、そこから心地よい保育園生活を過ごすための働き掛けとして、同じ人が関わる、1対1での対応を心掛けることが重要だと思う。顔なじみの信頼できる大人を基盤にして、分からないという不安を、分かるという安心につなげていきたい。先ほど事務局の説明にあったように、物的な環境としては、タブレットや多言語の絵本の活用があり、人的な環境としては、ボランティアの活用や令和2年度から一部の保育園に多文化共生支援担当主任の配置をしている。

2つ目は、保育園は、遊びだけではなく、給食や午睡などの生活の場があり、特に給食には重要な役割がある。食事に関しては宗教食の対応が必須となり、母国の文化や風習を大切にしてもらえていると感じながら安心して食べることは、安心した園生活を送るために必要な配慮だと考える。保育園では、どれを食べてどれを除去するのか調味料や食材の一つ一つについて保護者と確認し、丁寧に対応している。

3つ目の特色は、直接体験を基にした楽しい遊びが沢山ある。その中で、言葉が分からなくても、五感をフルに活用しながら笑い合うことが安心した園生活につながっていくのではないと思う。保育園では、直接体験を基にした遊びを充実させていきたいと考えている。

- 幼稚園でも、保育園同様、毎日保護者と顔を合わせている。また、保護者会などを通じて保護者同士でつながることができることは強みである。外国語の得意な保護者が、外国にルーツを持つ子どもの保護者と一緒に役員業務をする際に仲介に入り、保護者同士のコミュニケーションが広がっていったという事例もある。

これまでの経験で言えば、保護者の日本語理解があまり変わらない中で、子どもが次第に日本語を覚え、通訳をするようになったこともある。園も、保護者とコミュニケーションを十分に取りたいので、紙に絵を描いたり、物を示したりしたところ、普段は会釈をするくらいだったが、徐々に色々なことを話し始め、こちらの誠意、気持ちが伝わったことが印象に残っている。色々な方法を使って、その人とつながりたいという行動を毎日積み重ねていると、子どもにも次第に安心感が広がっていった。先ほど保育園の話でもあったが、幼稚園も直接体験や環境を通した教育を大事にしており、子どもが遊びを楽しむ状況を作り出すことを大切にしている。

次回の議題にも関わるが、家族全員が外国から来られ、子どもの発達に課題があった事例

では、日頃は母親と話していたが、日本語の理解が十分にできないため、しっかりと話をしたい時には、日本語の読み書きができる父親と話すようにしていた。就学前になり、小学校入学に当たって細やかな手立てがあることを伝えたが、保護者の理解を得られず、文化の違いにより特別支援教育の捉え方が違うという状況を経験したことがあった。

小さな頃、3歳くらいから保護者とも十分にコミュニケーションを図りながら、支えていくことが出来ればよいと思う。0歳からの育ちを家庭と園が情報共有をしながら、小学校につないでいくことが必要ではないかと思う。

- 子どもが安心して生活を送ることについて小学校の立場から話したい。1点目は、本校でも日本語指導を要する子どもが在籍し、「生活言語」と「学習言語」については、やはり、言葉をしっかりと獲得していなければ、生活言語は分かっても、学習指導要領の内容を理解するところまで育てることは難しく、言葉の壁が大きいと感じている。外国籍の子どもが多く在籍する2校でも同様と聞いており、その2校には、日本語指導コーディネーターが配置されている。子どもたちが安心して学校・園生活を送るためには、この制度が拡大できるとよい。

2点目は、保護者とつながることについて、先ほどの意見の通り、小学校でも保護者との意思疎通に課題がある。同じ国の方が多く在籍している学校では、保護者同士がネットワークを形成して学校の様々な事柄を理解しているようである。一方で、同じ国の人がない保護者については、そこまでは難しく、国や保護者によって必要な対応は異なることから、状況を十分に確認しなければ上手くいかないことがある。

子どもは日本語の理解が早く、次第に親に伝達できるようになるが、少し難しい手続きとなると子どもは理解できないため伝えきれない。通訳ボランティアやポケトーク、写真で見せるなど、色々な方法を使いながら保護者の意向を確認することが大事だと感じる。

小学校では、時間割を基に学習が進むこと、PTA組織の活動や内容が学校によって違うこと、宿題があることなど、入学後に初めて経験することもあるため、年長児の接続の頃には、保護者にこのようなことを伝えておくと、入学にむけて見通しを持つことができるのではないかと思う。

- 本園の周辺には、インターナショナルスクールが多くあるがそこに行かない子ども、イスラム教のモスクが近くにあるのでイスラム教の子どもなど、様々な子どもが在籍している。

日本に来て不安になっている保護者、子どもを日本の文化に出合わせたいと願う保護者のニーズを園で受け入れることについては、例えば、イスラム教では、豚などの食材や文化の違いから、園でしていることができないこともある。また、お祈り等の宗教的な違いを受け入れられるかなど丁寧に保護者と関わっていく必要がある。また、両親ともコミュニケーションが取れない場合は、身近に通訳をしてくれる人がいなければ園では難しいこともあるため、入園に当たっては、その子を受け入れる体制があるかどうかを検討している。神奈川県には外国にルーツを持つ子どもとその保護者の相談を受ける相談サポーターの制度があるが、公立小学校のようにきっちりしているわけではないため、入園後に孤立することや上手くいかないことがないようにと考えている。入園後は園の責任となるため、「安心して」となると、どのようにコミュニケーションを取るかということになる。

以前、外国籍の保護者が手掴みでご飯を食べる文化について説明したものを作ってくれて、園で他の子どもも手で食べてみたことがある。相手の文化を知ることや、「色々な世界の人がいていい」と感じることで、多様な場所で人は生きていて、日本人のやっていることが正しいわけではないことなど、相手の文化を知る機会になる。逆に、餅つきなどを喜んでくれ、色々な国の人が日本文化を知る機会にもなっている。国際交流は頭の中にあるだけではなく、園で多様な子どもが混ざり合い、支えてくれる保護者が何かあれば通訳してくれる、周囲もお父さんやお母さんを応援してくれるというように、地域に多様な人がいて、その延長線上に園があるという位置付けだと思う。小学校入学の際も、こうしたネットワークがあると、外国籍の人を支えることができると思う。

皆さんの話にあったように、子どもが世界を広げようとする時に、子どもを通して、保護者同士も繋がっていくとよい。英語を使えたと国際人ということではなく、多様な人がいて、その文化を受け入れる体制を園にどう作っていくかが乳幼児期には大事だと思っている。

・ 小学校との円滑な接続のために必要な視点について

○ 生活習慣や宗教上の配慮点について、保育園・幼稚園等での乳幼児期からの経験は、小学校入学後の各国の習慣や文化の捉え方、共生の意識にも関わってくるだろう。先ほどの話にあったように、多様な文化を受け入れることについては、礼拝時間が必要な子どもへの対応や、手をつなぐことができない、頭を触ってはいけないなどの慣習への配慮等、色々な国の習慣や風習等に従ってどう対応するかは、一貫性が求められる重要な問題だと思う。

○ 文化的な背景をどうしていくかは、小学校以上は地域に開かれた教育課程が学習指導要領で位置付けられているように、異文化の人がいることで色々なことを学ぶことができると思う。配慮の必要な子どもについてもそうだが、世の中には、色々な人がいて、多様性を認めていく出発点に外国籍の子どももいて、どのように位置付けていくのかということだろう。こうした中で、学校の文化を考えなければいけないと思うが、箸の文化や手で食べる文化があることを知るなど、その子どもをどう受け入れるかだけではなく、外国籍の子どもを通して周りの子どもと一緒に学ぶ機会になる。トラブルもあるかもしれないが、そのことも含めて一緒に生活を考えることは、これからの教育にとっても大事になってくる。何ができるか、どうできるかは、子どもによって違うことから、学校と手を携えて考えていくとよいだろう。

留意が必要なのは、外国籍の子どもの中には日本語だけではなく母国語も理解できていないケースがある。環境によって言葉が出ないのか、本人の発達過程によるのかなど、一人一人に応じた対応を付けていく必要がある。落ちつかず走り回る子は、本当はどうなのかなど、個々に合わせて考えることが大事であり、外国籍だからという話ではなく、連携する小学校とのやりとりの中で、色々な子がいることをきちんと小学校に伝えることが上手くいけばよい。

○ 円滑な接続も含めて、外国から来ている人は、必ず同じ国の人とネットワークがあるので、これを活用するとよい。意思疎通、文化の違いへの対応を手助けしてもらう、例えば、学校や園、ネットワークの形成者と保護者、日本の文化を理解している通訳など、これらの関係

を保育園・幼稚園から、小学校へ引き継いでいくという仕組みがあるとよい。

既にそういう仕組みを活用している所もあると思うが、それを全体的に、しっかりとしたネットワークにしていけばよいと思う。

- 小学校との接続に当たり、本園では、小学校に子どもの様子を伝えるとともに、保護者に学校を紹介し、学校と話ができるように保護者と学校を繋いでいる。あとは、学校から幼稚園での子どもの様子を伺いたいという要望があれば受け入れている。
- 外国にルーツをもつ子どもだけではなく、基本は、全ての子どもを受容するように考えている。子どもも大人も皆で理解をしていくことが大事だと思う。小学校との接続のためには、個の理解をしっかりしていく「子ども理解」を視点としてもつことがよいと思う。
- 幼稚園では、保護者や子どもの様子について小学校と情報共有をしている。園と小学校が隣接している所も多くあるので、気になる子どもについては、折に触れて小学校の先生方に子どもの普段の姿を見てもらうようにしている。園が気にしている個々の姿も見てもらい、情報共有した上で、連携している。その際、保護者についても、園でのコミュニケーションの取り方や保護者が先輩の保護者とつながっていることなど、園が分かっていることを小学校に伝えている。連携会議で子どもの様子について話し、入学前に日本語のサポートを含めて整えてもらった事例もあり、このような連携を大切にしている。
- 先ほどの話にあったように、実際に、子どもの言葉の課題なのか、発達の課題なのか分からないケースもある。これについては、園からの引き継ぎが非常に重要である。例えば、雨が降ったら学校は休むなど、認識の相違によるトラブルもあるため、国による文化の違いや生活習慣の違いについて、どこかで情報がストックされ、見ることや聞くことができる機関があると、小学校との接続に役立つのではないかなと思う。
- 本市では義務教育段階から、日本語指導の仕組みがある。教育委員会に配置している日本語指導コーディネーターが外国籍の子どもが入学した学校を訪問し、その子どもの日本語能力の見取りをした上で、個別の指導計画を作成して指導に当たっている。また、必要に応じて日本語指導講師を学校に配置し、中学校卒業まで日本語指導を行う仕組みがある。

皆さんの御意見を聞き、幼稚園・保育園に対してその仕組みの周知ができていないと感じた。広く周知し、幼稚園・保育園の先生方にも日本語の学習をしている姿を見てもらい、保護者にも学校に来てもらおうと、日本で義務教育を受けることがイメージできると感じた。

また、コミュニティのことについて、本市では、今年度から幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校で学校教育活動地域連携推進事業を始めた。これは、地域と共に学校を作るということで、これまで学校が地域にゲストティーチャー等のお願いをしていたことを、地域の活性化にどうつなげるか、また、地域の活性化に向けて、子どもが地域の行事に積極的に参加するような風土を作りたいと考えている。広島市の外国籍の子どもについては地域性があると思うが、当懇談会で出された御意見を視野に入れて、地域性を生かした活動の場を設置すると、子どもと保護者も安心して暮らしていけると思う。

- 本市の障害のある子どもの小学校就学に当たっては、私立・公立、幼稚園・保育園、全ての療育機関等に案内を出し、就学に関して気になることを相談できる機関を設けている。このことは、主に次回の本懇談会の議題になると思うが、外国にルーツをもつ子どもの小学校への接続については、先ほどから話に出ているように、当課にも関わりがあるため、障害を持つ子どもと外国にルーツを持つ子どもがリンクする部分について情報提供する。

本市の１学年の子どもが約１万人いるうち、約８５０人が就学相談に来ている。その相談は、１人当たり４～５回、延べ４，０００件程だが、そのうち保護者や子どもが日本語に難しさを抱えているケースで、障害がリンクしているケースは数えるほどしかない。おそらく、そのまま小学校に上がっているのではないかと思う。

相談に来られた際には、発達段階を見ていくが、すぐに、日本語理解が十分でないのか、発達上の問題なのかは分からない。色々な課題を行い、非言語的な発達の状況、知識理解というものが大事となってくる。どこまで日本語が習得できているのかという実態把握と、作業課題の操作など言葉を介さない非言語能力のギャップがどの程度あるのかを見ていくと、日本語を使ってないためなのかなどは想像できる。これは、子どもの状況を客観的に把握する方法にすぎないため、先ほどからの話にあるように、個々に合わせた対応がより大切である。相談時には、保護者が自身のネットワークを使って通訳の方と一緒に来てくれることも多くあり、こうしたネットワークを使って学校に伝えていくことや個々の理解を共通の視点でもつことなどが大切だと思う。